

『弘法大師と書道』

弘法大師の書を考える時に、最も注目しなければならぬのは、大師の強い開拓精神であると思います。この点、他の方々には見られない特色があると思います。中国に同時に留学された伝教大師と比べてみましても、伝教大師は、実にオーソドックスな中国書道の正脈というようなものを伝承されており、ところが弘法大師の持つてこられたものは、これから日本に流行するというような珍しい書風だけをえらんでこられたとさえいえるのです。当時の中国は、書道史の上でも大きな曲り角に当たる時代で、自由な書風が流行し、芸術至上主義的なものが全体の承認を得るかどうかという時だったのです。こういう中で、大師はその最も新しい、最も新鮮なものをつかんでこられたのです。これは、弘法大師の性格とにらみあわせて、大切などころではないかと思えます。この時代に中国に行つた他の人々が、みなオーソドックスな書体を学んで帰っているのに、弘法大師は、時代の最先端をいく、超モダンな書体をえらばれて、他の人が楷書・行書・草書だけしか書かない時に、大師は隸書を書かれる、篆書は書かれる、その他破体であるとか飛白であるとか、実にいろいろなものを書かれるんです。おそらくそのころの長安、洛陽などにみられる創作的な書体はほとんどご自分の目でとらえてきておられるんですね。その中の超

モダンなものを、日本へもつて帰って、それを再現されたわけですが、その場合も、



「周燕」昭和54年

中国の丸うつしのものはひとつもないんです。イミテーション（模倣）じゃないんですね。いっぺん弘法大師という人格を通して、かなり大きく変えて再現されているんですね。私が大師に敬慕の念を禁じ得ないところは、ここなんです。

これは大師の芸術的天分でしょうし、同時に大師の書は、ご自分の哲学の表現だったと思います。大師の書かれたものは、その内容と書体をあわせて考えた時に、これは何の書体で書こうという選択が、実にお上手です。こういうのはこの書体がアピールするということをよく知っておられるんです。そしてこの考えが書を通じて出てくる時、書は大師の哲学の表現となってくるのです。もうひとつ大切なことは、弘法大師の字は、非常に流動的だということです。絶えず躍動してやまないのです。好んで躍動的な字を書かれたということとは、やはり大師の内部にあるものが躍動的だったということでしょう。大師の書には、生々流転してやまない気迫があふれています。生々流転する世界の万象を筆端にたくして表す。しかもその中にたえず発展してやまない前向きの姿、弘法大師の御生誕千二百年を迎えた今、私たちはもう一度大師の書に秘められたこの開拓精神をくみ取ってみる必要があると思えます。大師の字を形の上から考えるのではなくて、その時代の最も新しいものを先取る精神、新しいものへの推進の気迫、これを受け継ぐのが本当の大師流であると思えます。

私は、弘法大師を洋服の生地にととるんです。生地として素晴らしいもので、親子代々着てすり切れたりする生地じゃない。だけど、仕立てが古くては、今の人に着せることはできないんです。書道でも宗教でも同じだと思ふんですが、中には、手も通らないなんていう古い服もあるんです。これはやはり仕立てなおしが必要なんです。地は、そりゃあ千年着ていてもすり切れるようなものじゃない。だけど現代の人の体格に合うように仕立てなおして着せることです。そこに今の宗教家の存在があるんじゃないかと思ふんです。多くの人々がそういう結構な洋服を着る機会が是非ほしいと思つています。

『光明』昭和四十八年三月

『筆間雑記』中村素堂随筆集(昭和六十三年刊)より転載。